

# A 看護系大学保健学科目選択者の「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」の活用状況と解釈をふまえた保健師教育の検討 —「社会資源の理解・活用・開発」に着目して—

蘇武彩加<sup>1)</sup>，佐藤公子<sup>1)</sup>

## An Examination of Public Health Education Taking into Account the Utilization and Interpretation of “Practical Competency and Performance Goals for Public Health Nurses, and Achievement Level Required at Graduation” by Students Who Have Selected Health Sciences Courses at A Nursing University — Focusing on the “Understanding, Utilization, and Development of Social Resources” —

Ayaka Sobu<sup>1)</sup>，Kimiko Sato<sup>1)</sup>

### 要 旨

本研究の目的は、A 看護系大学の保健学科目選択学生の「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」（以下、『到達度』）の活用状況や、「社会資源マップ」に取り組む目的の解釈及び実習中と実習後の活用状況等を明らかにし、保健学科目選択学生が「社会資源の理解・活用・開発」ができるように保健学科目の教育内容を検討することである。研究方法は、フォーカス・グループ・インタビューである。その結果、学生の『到達度』の活用は実習前後で拡がりが見られず、技術項目の解釈は十分に解釈できていない項目の他、狭義の解釈に留まっている項目もあった。『社会資源マップ』については、総合的にアセスメントする地域診断の一環であるという目的の理解はできていた。このため、今後は、『到達度』を活用することの意義や効果を繰り返し説明し、学生に意識づける必要がある。また『到達度』を提示する際、各技術項目が何を表しているか、どのように取り組むことで到達できるかを伝え、学生の解釈を確認する必要がある。そして、『社会資源マップ』は、社会資源の活用や開発の視点まで広げ、実習後の事例検討などの演習にも活用していく必要性が示唆された。

キーワード：保健師教育，実践能力，社会資源の理解・活用・開発，専門能力

### I. はじめに

急速な人口減少と少子高齢化の進展が予測される中、介護問題，虐待，自殺，感染症や災害などの健康危機管理への対応など，保健師には複雑化，困難化する社会のヘルスニーズに対応していくことが求められている。

保健師教育は2009年の保健師助産師看護師法の改正により，保健師教育課程の教育年限が6か月から1年以上に延長された。また，2011年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正により，保健師国家試験受験資格取得に必要な単位が23単位から28単位に増加し，臨地実習

受付日：2023年4月14日 受理日：2023年10月12日

<sup>1)</sup> 岩手県立大学看護学部 Faculty of Nursing, Iwate Prefectural University

の単位も4単位から5単位に増加した。そして、看護系大学の卒業要件であった保健師教育が選択制となり（大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会，2011），看護系大学における選択制は90.4%となっている（文部科学省，2021）。また，保健師教育において，「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」（以下、『到達度』）（厚生労働省，2010）が提示され，保健師基礎教育における到達目標と到達度を設定している。看護系大学において保健師教育が選択制となったことで，波田・山下・藤本・都築（2016）は，従来の看護師・保健師の統合カリキュラムで学んだ学生と保健師教育を選択制として学んだ学生の卒業時の到達割合を調査し，保健師教育を選択制として学んだ学生の到達割合が高かったことを報告している。また，鈴木他（2016）は，保健師教育を選択制にした複数の大学の学生を対象とした調査において，保健師教育の選択制導入の前後で到達割合が増加したことを報告しており，保健師教育を選択制にしたことで，全体的に到達割合が高くなっていることが明らかにされている。そして，その他に関連する研究としては，看護系大学教育課程で保健師コースを選択した学生の3年間の学習到達度を全国調査と比較し，保健師教育の課題を明らかにしている研究（富田・西田・石井・波川，2020）がある。加えて，看護系大学教育課程で保健師課程を選択した学生の実習前後の到達度の変化を報告している研究（荻原・南部，2019）等もある。

A看護系大学は1998年に開学した。開学当初，保健師教育は看護系大学の卒業要件であり，必修としていたが，2015年以降，選択制とし，講義や実習を展開している。『到達度』については，実習要項に掲載し，実習に入る際のオリエンテーションで活用方法と共に説明している。具体的には，実習期間中に日毎の実習目標を立案する際，『到達度』を踏まえた実習目標を立案することで，主体的な実習に結び付くことを指導している。また，保健師教育課程担当教員は，毎年度，保健学科目を選択した学生に『到達度』を用いて自己評価させ，翌年度の講義や実習指導に活用している。しかし，過去数年の学生による『到達度』の自己評価に関するデータをみると，到達度が低い項目として，「No.2社会資源について情報収集し，アセスメントする」，「No.25活用できる社会資源，協働できる

機関・人材について，情報提供をする」，「No.26支援目的に応じて社会資源を活用する」，「No.34活動の評価を行う」，「No.50活用できる社会資源と利用上の問題を見出す」，「No.60施策化が必要である根拠について資料化する」，「No.69地域資源と地域の健康課題に応じた保健師活動の研究・開発を行う」などがあり，大きな変化はない。仲下（2018）は「保健師に求められる実践能力と卒業時到達度」の自己評価に関する文献レビューを行い，情報提供や社会資源の活用，多職種連携，法律や条例等を踏まえた活動，保健活動の評価，社会資源の開発やシステム化・施策化の到達度が低いことを明らかにしている。このことから，仲下（2018）が指摘する到達度の低い項目は，A看護系大学においても同様の傾向にあることが伺える。

この到達度の低い項目のNo.2，No.25，No.26，No.50，No.69は，社会資源の活用や開発に関する項目であった。社会資源とは，「生活上の諸欲求の充足や問題解決を目的として利用できる各種の制度・機関・団体および人々の知識・技術などの物的・人的諸要素を総称」したものである（看護学大辞典 第6版，2013）。地域における保健師の活動では，社会資源についてフォーマル・インフォーマルを問わず理解し，活用することが不可欠である。また，支援の対象となる個・集団・地域において，既存の社会資源では対応できないニーズが生じた場合は，社会資源の開発が必要になる。岡本他（2007）は，今，特に強化が必要な保健師の専門能力の1つとして，政策や社会資源を創出する能力を示しており，社会資源を理解し活用することに加え，保健師には開発できる能力が求められている。しかし，先に述べたNo.2，No.25，No.26，No.50，No.69の到達度の状況から，学生の情報提供や社会資源の活用・開発に関する到達度は低く，その能力を強化する必要があると考える。

現在，A看護系大学の保健師教育課程では，保健師の専門能力の1つである「社会資源の理解・活用・開発」に関する能力の向上を促すため，実習の際，実習記録として『社会資源マップ』を課している。この『社会資源マップ』は，地域診断の一環として，実習市町村の地図を描き，事前学習として物理的環境や教育，安全と交通，保健医療と社会福祉などをマッピングし，実習中・実習後も新たに把握した情報を書き加

え、実習市町村を理解することに活かしている。しかし、この地域診断の一環としての実習記録である『社会資源マップ』が、学生にとって“既存の社会資源の記載”となり、地理的特徴を把握しての地図の記載や、地域偏在を考慮する視点が不足しており、「社会資源の理解・活用・開発」に十分に活かされていないことも考えられる。

そして、『到達度』では、活用状況と到達度の評価が学生による自己評価のため、学生が各項目をどのように理解し、到達目標に到達できるように取り組んだかを把握できなかった。加えて、社会資源の活用や開発が評価できても、社会資源の理解については測ることができていない。

以上のことから、A看護系大学の保健学科目選択者の『到達度』の活用状況と、保健師に特に求められる技術の1つである「社会資源の理解・活用・開発」について、どのように解釈しているのかを明らかにし、講義や演習、実習を通し「社会資源の理解・活用・開発」に関する能力を向上できるよう教育内容の検討を行う必要がある。

## Ⅱ. 研究目的

本研究の目的は、A看護系大学の保健学科目選択学生の『到達度』の活用状況、『到達度』における5つの技術項目の到達度に到達するための行動、「社会資源マップ」に取り組む目的の解釈及び実習中と実習後での活用状況を明らかにし、保健学科目選択学生が「社会資源の理解・活用・開発」ができるように保健学科目の教育内容を検討することである。

## Ⅲ. A看護系大学における保健師教育課程の概要

A看護系大学の保健師教育課程は、3年次9月に保健学科目選考試験を行い、保健学科目選択者を決定している。その後、保健学科目選択者は保健学科目として10単位を履修することとなっており、その科目と開講時期は図1の通りである。

本研究における「保健師教育」の科目は、地域看護システム論Ⅱ・地域看護活動論Ⅱ・地域看護学実習Ⅱ・地域看護学実習Ⅲを指し、本研究で取り上げている「社会資源の理解・活用・開発」に関する教育はそれらの科目の中で組み立てている。

年次	3年次前期	3年次後期	4年次前期	4年次後期
科目	保健学科目 選考試験	・地域看護学実習Ⅱ（※1）	・地域看護学実習Ⅱ（※1） ・地域看護活動論Ⅱ（※2） ・地域看護システム論Ⅱ（※3） ・地域看護学実習Ⅲ	・地域看護活動論Ⅱ（※2） ・地域看護システム論Ⅱ（※3）

※1：地域看護学実習Ⅱは3年次後期または4年次前期のどちらかで行う

※2：地域看護活動論Ⅱは4年次前期後期の通年科目である

※3：地域看護システム論Ⅱは4年次前期後期の通年科目である

その他：3年次前期までの一部の看護科目を保健学科目に読み替えあり

図1 A看護系大学における保健師教育の科目と開講時期



## IV. 研究方法

### 1. 用語の定義

解釈は、「言葉や文章の意味・内容を自分なりに考え、理解すること」とする。

### 2. 研究協力者

A 看護系大学で2022年度に保健学科目を選択した4年次の学生9名のうち、本研究への参加について同意が得られた者。

### 3. 方法

対象となる学生に研究責任者が、本研究の趣旨、目的、研究方法、研究成果の公表、研究への協力は自由意思で、研究への不参加による不利益はないこと、科目等の評価に影響しないこと、個人が特定されないこと、研究の途中でも研究協力への取り止めができること、インタビュー内容は録音することを文書と口頭で説明し、同意書への署名により同意を得た。なお、同意撤回書についても説明し、同意撤回する場合は、調査実施日から1週間以内に同意撤回書を研究責任者宛に送付することとした。

データ収集方法は、講義・実習を含む全ての保健学科目の履修が終了し、担当講座での成績評価が終了した時期として、2022年11月に、フォーカス・グループ・インタビューを行い、内容を録音した。フォーカス・グループ・インタビューを選択した理由は、研究協力者間で相互の意見を聞くことにより内容が深まると考えたためである。

### 4. 調査内容

まず、学生に『到達度』の活用について自由に語ってもらった。

次に、「社会資源の理解・活用・開発」の解釈と今後の教育内容を検討するため、『到達度』において、「社会資源」という用語が用いられており、「社会資源の理解・活用・開発」に関わる5つの技術項目について、どのように解釈しているか、また、その技術項目の到達目標に到達できるようどのように取り組んだかについて、自由に語ってもらった。5つの技術項目は、「No.2 社会資源について情報収集し、アセスメントする」、「No.25活用できる社会資源、協働できる機関・人材について、情報提供をする」、「No.26支援目的に応じて社会資源を活用する」、「No.50活用できる社会資源と利用上の問題を見

出す」、「No.69社会資源と地域の健康課題に応じた保健師活動の研究・開発を行う」である。

そして、「社会資源の理解・活用・開発」に関わる実習記録の『社会資源マップ』について、取り組む目的をどのように解釈していたか・実習中／実習後に社会資源マップをどのように活用したか、について自由に語ってもらった。

### 5. 分析方法

フォーカス・グループ・インタビューの内容を逐語録に起こし、分析の視点に沿って語られている文脈を抽出した。分析の視点は、『到達度』については、「どのように活用していたか」と、各技術項目を「どのように解釈し、その解釈に基づいた到達度に到達するための行動は何か」とした。『社会資源マップ』については、「取り組む目的をどのように解釈していたか」と、「実習中／実習後に社会資源マップをどのように活用したか」とした。文脈を抽出する際は研究協力者の言葉を生かしつつ、意味内容が理解できる単位で区切りコード化した。その後、『到達度』の活用状況と各技術項目の解釈に基づいた到達度に到達するための行動、『社会資源マップ』に取り組む目的の解釈及び実習中と実習後での活用状況について、コードの類似性や相違性をもとに抽象度を高め、カテゴリ化した。分析は解釈の偏りを防ぐと共に、分析の妥当性を確保するため、全過程を通し研究者間で検討した。

### 6. 倫理的配慮

本研究の研究協力者は学生であり、研究協力に対する学生の自由意思を尊重し、強制力が働かないようにし、研究への不参加による学生の不利益はないこと、一度同意した後でも撤回できること、科目等の評価には影響しないこと、個人が特定されることはないこと、研究の途中でも取りやめることができることを説明し、同意を得て実施した。なお、本研究は岩手県立大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号366)。

## V. 結果

### 1. 研究協力者の概要

本研究への協力に同意の得られた学生は5名で、いずれも20代の女性であった。

## 2. 『到達度』の活用状況（表1）

逐語録から7つのコード、3つのカテゴリが抽出された。以下、カテゴリを【 】で示す。

【実習中に実習目標を立案する】は、『到達度』を参考に日々の実習目標を立案したというもので3つのコードから構成された。

【実習での到達度を確認する】は、実習における到達度を確認したというもので、3つのコードから構成された。

【実習前は活用しなかった】は、実習に入る前は『到達度』を活用しなかったというもので1つのコードから構成された。

## 3. 『到達度』における5つの技術項目の到達度に到達するための行動

5つの技術項目毎に述べる。以下、カテゴリを【 】で示す。

1) 「No.2 社会資源について情報収集し、アセスメントする」の到達度に到達するための行動（表2）

【実習前はフォーマル・インフォーマルを問わず、地域の社会資源を調べた】は、実習前に地域の社会資源について、フォーマル・インフォーマルを問わず調べたというもので3つの技術項目の解釈に基づいた行動のコードから構成された。

【実習中は関わった住民が利用可能な地域の社会資源を情報収集した】は、実習中に参加した保健事業の対象者との関わりを通し、対象者が利用できる地域の社会資源について情報収集したというもので3つの技術項目の解釈に基づいた行動のコードから構成された。

【実習後は情報収集を基に地域の現状・課題・強みをアセスメントした】は、実習後に社会資源の情報収集の結果をふまえ、現状や課題、強みについてアセスメントしたというもので3つの技術項目の解釈に基づいた行動のコードから構成された。

表1 『到達度』の活用状況

カテゴリ	コード
実習中に実習目標を立案する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習中の保健事業に合わせてそれを確認して、目標が何で何を達成すればいいのかを毎日の記録の目標を書く時に使って決めていた</li> <li>・実習で毎日の目標を決める時に、そこに書かれているのを見ながら達成できるように書いて使っていた</li> <li>・実習中、翌日家庭訪問があるとすると、その項目で何を達成すればいいのかを把握して実習目標に書いた</li> </ul>
実習での到達度を確認する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の中でこれを達成すればいいのだということを意識して実習に臨んだ</li> <li>・地域看護学実習Ⅲで自分がどこまでできていいのかが分からなかったため到達度を確認し、見学ではなく実習することを確認した</li> <li>・実習中に毎日みて、どこを理解できるかというのを振り返りというか照らし合わせをした</li> </ul>
実習前は活用しなかった	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習前はあまり見る機会がなかった</li> </ul>

表2 「No.2 社会資源について情報収集し、アセスメントする」の到達度に到達するための行動

カテゴリ	技術項目の解釈に基づいた行動のコード
実習前はフォーマル・インフォーマルを問わず、地域の社会資源を調べた	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習前は病院や介護施設、福祉施設の軒数などを情報収集した</li> <li>・フォーマルからインフォーマル含めて、その地域にどんな資源があるのか知るため、市のホームページを見て調べたりした</li> <li>・フォーマルとインフォーマルの情報を収集してその地域にどんな社会資源があるのかを知るようにした</li> </ul>
実習中は関わった住民が利用可能な地域の社会資源を情報収集した	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既存資料や市の○○計画などで情報収集してアセスメントをしなければならないため、実習中のイベントや健診などで、対象者一人一人に関わっていく時に、この人は何か社会資源を利用しているのか、などの意識を持って話をした</li> <li>・赤ちゃん訪問の時には、母子系の何かサービスを使う余地あるのかなど、今使っているとか、意識しながら話を聞いた</li> <li>・実習中は住民がどの位の距離、物理的な距離であれば心理的に行きやすいかの距離を把握した</li> </ul>
実習後は情報収集を基に地域の現状・課題・強みをアセスメントした	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習後は情報収集した社会資源などを含めながら、その地域の現状と課題と今後の予測をレポートの中で行った</li> <li>・こういうところに強みがあるや、ここが足りていないということをアセスメントした</li> <li>・地域診断で地域の特性を書く時に、どういう施設が何個あるかということからアセスメントした</li> </ul>

2)「No.25活用できる社会資源，協働できる機関・人材について，情報提供をする」の到達度に到達するための行動（表3）

【実習前は社会資源や関係機関の活動の把握を試みるも分からなかった】は，実習前に社会資源や関係機関の活動の把握をするよう努めたが分からなかったというもので2つの技術項目の解釈に基づいた行動のコードから構成された。

【実習中は場の見学や保健師からの協働について説明を聞いた】は，実習中に各種保健事業の見学・参加を通し保健師から協働に関する話を聞いたというもので3つの技術項目の解釈に基づいた行動のコードから構成された。

【実習後は事前学習と統合させ，対象者の支援の考察をした】は，実習後に事前学習もふまえ，対象者に必要な支援について検討したというもので2つの技術項目の解釈に基づいた行動のコードから構成された。

3)「No.26支援目的に応じて社会資源を活用する」の到達度に到達するための行動（表4）

【社会資源の活用を考慮し，実習前は社会

資源の学習をした】は，対象を支援する際に社会資源を活用することを考慮し，実習前に社会資源についての学習をしたというもので2つの技術項目の解釈に基づいた行動のコードから構成された。

【実習中は保健師や教員の指導を仰ぎ，対象に必要な社会資源をアセスメントし情報提供した】は，実習中に保健師や教員の指導を受けながら対象に必要な社会資源についてアセスメントし，それをふまえた情報提供をしたというもので5つの技術項目の解釈に基づいた行動のコードから構成された。

【実習中は社会資源の把握に留まった】は，実習中は社会資源を把握することに留まったというもので1つの技術項目の解釈に基づいた行動のコードから構成された。

【実習後の振り返りで既存の社会資源の評価をした】は，実習後の振り返りで対象者にとっての社会資源の使い易さや既存の社会資源同士のつながりを考えたというもので4つの技術項目の解釈に基づいた行動のコードから構成された。

表3 「No.25 活用できる社会資源，協働できる機関・人材について，情報提供をする」の到達度に到達するための行動

カテゴリ	技術項目の解釈に基づいた行動のコード
実習前は社会資源や関係機関の活動の把握を試みるも分からなかった	・実習前はこういった社会資源があったり，例えば社会福祉協議会がどんなことをしているのかということを知りたかった ・実習前は協働できる機関や人材というのが調べても出てこないというか，わからない感じであった
実習中は場の見学や保健師からの協働について説明を聞いた	・保健師が対象者である住民に情報提供するというので，実習中は実際に提供されている場に行くことが多かったため見学した ・実習中にこういう検診の時は保健委員などが手伝ってくれるなどの話を保健師から聞いた ・市町村だけでなく地域包括支援センターでも実習を行ったため，その時にどのように連携しているのか話を聞いた
実習後は事前学習と統合させ，対象者の支援の考察をした	・実習後は，対象者の方，個人的に支援することはないが，どんな支援が必要か，今後必要なのか，どんな機関につなげる必要があるかを訪問の記録などに書いた ・実習後は，実習前に調べていたことと，実習中に聞いたことをまとめた

表4 「No.26 支援目的に応じて社会資源を活用する」の到達度に到達するための行動

カテゴリ	技術項目の解釈に基づいた行動のコード
社会資源の活用を考慮し，実習前は社会資源の学習をした	・実習前には社会資源を学ぶところはもともとあった ・主に家庭訪問など個人が対象の時に，どんな社会資源を使えるのかを考えた
実習中は保健師や教員の指導を仰ぎ，対象に必要な社会資源をアセスメントし情報提供した	・実習中は色々な事業などに行き，社会資源を保健師に紹介してもらったり，自分でも質問した ・家庭訪問など個人に対して活用した ・情報収集してアセスメントして，それを踏まえた上でその人にどんな資源が必要かを再度アセスメントして，そこから導いたこういう資源が必要ではないかを捉えた ・実習中に先生や保健師に，この人に提供する社会資源としてこれが適切かというのを確認するようにした ・健康教育を行う時に，追加でこういう社会資源があるので活用してみてくださいと伝えた
実習中は社会資源の把握に留まった	・保健師だけでなく，他機関と協働して支援する必要があるが，実習中は社会資源の把握までしかできなかった
実習後の振り返りで既存の社会資源の評価をした	・実習後はこういう対象者がいたから，こういう社会資源が使えるのではないかとこのことをまとめた ・色々な保健事業を組み立てていく時にこの辺はこうなっていると振り返りをした ・今，実際に活用している社会資源を捉えて，もう一度評価し直した ・実習中には考えつかなかったが，実習後にここここが繋がってるんだと，こういう社会資源もあったと振り返った



4) 「No.50活用できる社会資源と利用上の問題を見出す」の到達度に到達するための行動(表5)

【社会資源を把握し、社会資源でカバーできていない部分を捉えた】は、既存の社会資源を把握した上で、使い易さも含め、その社会資源では賄えていない部分を捉えたというもので5つの技術項目の解釈に基づいた行動のコードから構成された。

【実習後は今後必要な支援を考察した】は、実習後に今後対象に必要な支援について検討したというもので1つの技術項目の解釈に基づいた行動のコードから構成された。

【対象者に合った社会資源であるかを検討した】は、実習で関わった対象者の状況を捉え、個に適した社会資源であるかを検討したというもので2つの技術項目の解釈に基づいた行動のコードから構成された。

5) 「No.69社会資源と地域の健康課題に応じた保健師活動の研究・開発を行う」の到達度に到達するための行動(表6)

【どうということ分らず、社会資源の情

報収集と健康課題を見出すことに留まった】は、この技術項目がどのようなことを意味しているのか分からず、社会資源の情報収集をし、健康課題を見出すことに留まったというもので2つの技術項目の解釈に基づいた行動のコードから構成された。

【地域診断で健康課題の予測を立てた】は、地域診断を行い健康課題を予測したというもので2つの技術項目の解釈に基づいた行動のコードから構成された。

【実習中は地域に合わせた保健師活動の工夫を学び、知識・技術の向上を図った】は、地域特性を考慮し、各種保健事業の場における保健師の活動や関わりの工夫を学び、保健師としての知識・技術の向上を図ったというもので5つの技術項目の解釈に基づいた行動のコードから構成された。

【実習後に自己の気づき・考えを整理した】は、実習後に振り返りをし、これまでの学びや自身の気づき・考えを整理したというもので3つの技術項目の解釈に基づいた行動のコードから構成された。

表5 「No.50 活用できる社会資源と利用上の問題を見出す」の到達度に到達するための行動

カテゴリ	技術項目の解釈に基づいた行動のコード
社会資源を把握し、社会資源でカバーできていない部分を捉えた	・実習前は社会資源の把握などをした ・実習前は社会資源の駄目なところではないが悪い部分なのかなと思い、それを探した ・いいところばかりではなく、その社会資源でカバーできていないところを探すようにしていた ・実習をする中で良い・悪いではなく、対象者として除外されていないか、カバーできていない部分はないかをみた ・社会資源があるからよしではなく、使いづらさや距離、雪と交通機関との関係で問題を見出した
実習後は今後必要な支援を考察した	・実習後は直接的にはできないが、今後必要な支援を検討した
対象者に合った社会資源であるかを検討した	・個人に対するもので、その対象者に合った社会資源を十分に検討した ・実習中は対象者の特性で、訪問前に聞いた時は訪問した方が耳が遠く、新しい人とトラブルを起こしやすい感じで、そういう時にこの社会資源の利用上の問題点とつながるのかなと思い、そこを把握することは大事だと思った

表6 「No.69 社会資源と地域の健康課題に応じた保健師活動の研究・開発を行う」の到達度に到達するための行動

カテゴリ	技術項目の解釈に基づいた行動のコード
どうということ分らず、社会資源の情報収集と健康課題を見出すことに留まった	・実習前はということかわかっていなかった ・実習中も社会資源の情報収集をしたり、健康課題を見つけることはできたがそれに対する保健師活動の研究・開発がわからず、それ以上進まなかった
地域診断で健康課題の予測を立てた	・社会資源の状況や地域の健康課題の状況を判断し、地域住民が健康に過ごすことができるように、学生で保健師を目指す人として、実習前は地域の社会資源と健康課題を分析した ・実習前は、人口の、老年人口が高いなどで、その健康課題に応じてこういう活動をしているという予測を立てた
実習中は地域に合わせた保健師活動の工夫を学び、知識・技術の向上を図った	・その地域の特性に合わせて、保健師がどこに特化して活動しているのかを把握した ・実習中は現場で働いている保健師や歯科衛生士、地域の高齢者の方から助言をもらえるようになるべく質問をした ・実習中は、今回〇〇に行った時に、高齢者が多いことでその高齢者に対する事業がすぐ行われているのだとか、高齢者に対する接し方などをかなり工夫していることも見たので、保健師活動の工夫を見るように取り組んでいた ・地域の社会資源と健康課題に応じて、保健師が活動する中で、自分に足りない知識や技術などを勉強し、自分の保健師力を高めた ・実習中には、色々な事業に参加して説明など自分でもしなければならぬが、よくわかっておらず、でも、一応説明はする場面があり、実習後には、その説明がこういう背景があるからしているや、乳幼児健診においても子どもに対する接し方や、高齢者への話しかけ方など、自分の技術を向上するような取り組みをした
実習後に自己の気づき・考えを整理した	・実習後は、自分の気づきや考えを整理することがゆくゆくは、保健師の自己研鑽につながっていくのかなと思い取り組んだ ・実習後は、今回〇〇に行ったが、前は△△で、やはりその地域の健康課題が変わっていたので、そこでの違いや差というのを保健師活動の違いというを考えてみた ・実習後の最後の授業で、保健師活動の研究開発というか事業を立てる演習をする上でこの研究開発だったのかなと、今になってなんとなく思った

#### 4. 『社会資源マップ』に取り組む目的の解釈（表7）

逐語録から4つのコード、2つのカテゴリが抽出された。以下、カテゴリを【 】で示す。

【社会資源の可視化のため】は、目に見えづらい社会資源を紙面上に示すというもので3つのコードから構成された。

【社会資源は馴染みのないもので、自分で調べないと分からない】は、普段の生活で馴染みのない社会資源ゆえに調べなければ分からないというもので1つのコードから構成された。

#### 5. 『社会資源マップ』の実習中／実習後の活用状況（表8）

逐語録から7つのコード、3つのカテゴリが抽出された。以下、カテゴリを【 】で示す。

【社会資源のマッピングの他、地区名を調べて書くことで実習でリンクさせるようにした】は、既存の社会資源をマップに記す他に地区名も記すことで実習で訪れた時に地域を理解できるようにしたというもので1つのコードから構成された。

【事前に書いた社会資源マップを基に地域に身を置き、特徴を掴むようにした】は、実習前に作成した社会資源マップを基に実習で各地を回る際、地域の特徴を掴むようにしたというもので4つのコードから構成された。

【住民から得た情報を加筆して整理した】は、実習で関わった住民から得た情報を社会資源マップに加筆し情報を整理したというもので2つのコードから構成された。

表7 『社会資源マップ』に取り組む目的の解釈

カテゴリ	コード
社会資源の可視化のため	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その地域の社会資源がどのように点在しているのかを、可視化するため</li> <li>・どこに、何がどれだけあるのかというのを目的にするのもそうだが、知らない場所だから本当に何があるかというのを調べないと分からないため、どこがなに、どれだけあるのか。</li> <li>・何の資源がどこの地域に足りないかということを把握するため</li> </ul>
社会資源は馴染みのないもので、自分で調べないと分からない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会資源ということで、よく行くお店なら全然知っていると思うが、社会資源については本当に情報がわからない。自分から調べないと今の自分が行く場所でもないため、それをどこにあるのかというのを目的にやっていた</li> </ul>

表8 『社会資源マップ』の実習中／実習後の活用状況

カテゴリ	コード
社会資源のマッピングの他、地区名を調べて書くことで実習でリンクさせるようにした	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市の全体図を書いた時に、社会資源を書くこともそうだが、どこの地区なのか、実習に行くと保健師がここは何何地区だよと説明してくれるが、社会資源マップにしていないと、その市のどこにいるのかが、よく分からず、その市全体を書いたあとに、また何何地区というのを調べて書いていた</li> </ul>
事前に書いた社会資源マップを基に地域に身を置き、特徴を掴むようにした	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が今実習している場所と社会資源マップと見比べ、ここにいるのだということを把握した</li> <li>・同じ地域でも社会資源が集中しているところと全然ないところに分けられて、社会資源があまりない地域に行った時に、周りには田んぼが多いなということを実感した</li> <li>・あまり意識せずに取り組んだかもしれないが、実習に行ってから比較して、実際の身の置いているところとマップを照らし合わせた</li> <li>・実習前の事前学習として取り組んだ時は、社会資源と言っても調べられることに限りがあるため実際に行ってみて、社会資源のほかにこういうお店もあったとか、こんなに田舎なのだと感じたことをメモした</li> </ul>
住民から得た情報を加筆して整理した	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に色々対象者や住民に会ってお話を聞き、ここ行きづらいということを聞いたならそのことをメモした</li> <li>・対象者がどこに住んでいて、今日何で来たのかを聞き、交通手段はどうしているのかや、歩いて来たならなど、色々考えながら、社会資源マップにメモした</li> </ul>



## Ⅵ. 考察

### 1. 『到達度』の活用状況と5つの技術項目の到達度に到達するための行動からみる今後の取り組み

『到達度』の活用状況として、学生は【実習中に実習目標を立案する】ためや【実習での到達度を確認する】ために活用しており、【実習前は活用しなかった】ことが明らかとなった。これは、A看護系大学において『到達度』を実習に入る際のオリエンテーションで説明し、具体的な活用について指導しているためであり、当然の結果と言えるものの、実習後の講義や演習の場面への拡がりが見られなかった。『到達度』は、保健師に求められる役割・機能とその能力に対して保健師免許取得前の基礎教育における到達目標および到達度を設定し、能力の獲得を評価できるようにしたもの（厚生労働省、2010）であり、実習時以外でも広く活用していく必要がある。よって、今後は学生が実習時以外でも活用するよう促していくことが求められる。具体的方策としては、保健師教育に関わる講義や演習の中で、『到達度』を活用することの意義や効果について繰り返し説明することが挙げられる。

『到達度』に示されている能力は、卒業時迄に修得しきるものではなく、卒業後を含めて研鑽・向上し続けるものであり、保健師の専門性を理解し、保健師の専門能力を評価できるものである。そのため、保健師を目指す者として、講義や演習で学んだことや考えたこと、培った技術を評価するなど、学生自身が自己の成長を評価できるツールとして結び付くよう、それを講義や演習の中で教員が意図的に用い、学生に意識づけさせることが考えられる。特に演習等の場面において、演習時の目標や演習後の評価の際に、『到達度』を用いることで学生自身が客観的に自己の到達度を確認できると考えられ効果的であると考えられる。このようにすることで、これまで以上に【実習中に実習目標を立案する】ことや【実習での到達度を確認する】ことが可能となり、実習プログラムをもとに実習で何を理解したら良いか、何を達成したら良いか、今後の保健師活動への活用方法を意識して確認することができるだけでなく、効果的な演習等にも結び付くと考えられる。

今回明らかにした『到達度』の5つの技術項目の解釈に基づいた行動のコードをみると、各

技術項目について狭義の解釈になっている項目があった。具体的には、「No.25活用できる社会資源、協働できる機関・人材について、情報提供をする」の「保健師が対象者である住民に情報提供する」ということで、実習中は実際に提供されている場に行くことが多かったため見学した」という技術項目の解釈に基づいた行動のコードや「No.26支援目的に応じて社会資源を活用する」の「家庭訪問など個人に対して活用した」などの技術項目の解釈に基づいた行動のコードで、個人や家族という個への関わりとしての解釈に留まっていた。また、技術項目の解釈が研究者の意図する「社会資源の理解・活用・開発」に生かすという目的に至っていない項目もあった。「No.2社会資源について情報収集し、アセスメントする」や「No.50活用できる社会資源と利用上の問題を見出す」は、看護基礎教育の中でも種々の科目を通しベースとなる学びがある。例えば、看護の対象を支援するにあたり、対象の置かれている状況を把握するため、必要な情報を収集し適切なケアを判断し実施する看護過程の展開においての学びなどがある。しかし、情報収集することやアセスメントする、問題を見出すという1つの到達目標としてみるとその技術項目の内容を理解していると考えられるが、それが「社会資源の理解・活用・開発」に生かすベースとなるものであるという点において不十分さが伺えた。そして、その技術項目が何を表しているかを十分に解釈できていない項目もあった。具体的には、「No.69社会資源と地域の健康課題に応じた保健師活動の研究・開発を行う」で、「実習中も社会資源の情報収集をしたり、健康課題を見つけることはできたがそれに対する保健師活動の研究・開発がわからず、それ以上進まなかった」や「実習後の最後の授業で、保健師活動の研究開発というか事業を立てる演習をする上でこの研究開発だったのかなと、今になってなんとなく思った」などの技術項目の解釈に基づいた行動のコードがあった。

そのため、到達度に到達するための行動としても、【実習後は事前学習と統合させ、対象者の支援の考察をした】など個への支援としての視点に留まっているほか、【実習後に自己の気づき・考えを整理した】が抽出されたと考えられる。教員は保健師教育に関わる講義や演習において、到達度を提示するにあたり、各技術項

目について、それが何を表しているのか、どのように取り組むことで到達できるのかについても丁寧に伝え、機会を捉え、学生がどのように解釈しているのかを確認していく必要がある。そして、到達度に到達するための行動として、学生は【社会資源の活用を考慮し、実習前は社会資源の学習をした】、【実習中は場の見学や保健師からの協働について説明を聞いた】、【実習後は今後必要な支援を考察した】などから、実習期間中の活用に留まらず、実習前から実習後まで継続して取り組んでいることも示唆された。よって、先に述べたように、教員は『到達度』を活用することの意義や活用の仕方を分かりやすく伝え、講義と演習、その後に行われる実習を連動して捉えることができるようにしていく必要がある。そうすることにより、学生は『到達度』の各技術項目がそれぞれ何を示しているのか、到達度に到達するためにどのように行動すれば良いか、ということを考えることができ、到達度の向上にもつながると考えられる。

そのほか、各技術項目の到達度に到達するための行動として、【実習後は情報収集を基に地域の現状・課題・強みをアセスメントした】や【実習中は場の見学や保健師からの協働について説明を聞いた】、【対象者に合った社会資源であるかを検討した】、【実習中は地域に合わせた保健師活動の工夫を学び、知識・技術の向上を図った】などがあった。これらは、自分の実習する地域の健康状態・課題を分析し、課題解決のための方策を見出す地域診断の一つであり、今回調査した5つの技術項目全てで、学生は『到達度』に到達するための行動として行っていた。保健師は、地域保健活動を行う中で疑問や課題に直面した際、地域診断を行い健康課題を明確化させたり、あるいは文献検討や研究を行い、エビデンスを積み重ね、それを活用して実践活動に生かすことを繰り返している。A看護系大学の保健師教育課程において、地域診断の一環として取り入れている『社会資源マップ』の活用とも連動させ、『到達度』における技術項目が意味するものや『社会資源マップ』を活用しての地域診断について、それぞれ正しく解釈し、『到達度』に到達するための行動につながる事が期待される。

## 2. 『社会資源マップ』に取り組む目的の解釈と活用状況をふまえ、「社会資源の理解・活用・開発」に関する能力を高めるための今後の取り組み

『社会資源マップ』に取り組む目的について、【社会資源の可視化のため】や【社会資源は馴染みのないもので、自分で調べないと分からないから】としていた。また、活用の仕方としては、【事前に行った社会資源マップを基に地域に身を置き、特徴を掴むようにした】、【住民から得た情報を加筆して整理した】などしていた。このことから、学生は既存の社会資源を見える化するもので、数量化できない質的データの記録をまとめるツールとして活用していることが伺え、量的データと質的データの分析結果を総合的にアセスメントする地域診断の一環であるという目的は理解できていると考えられる。しかし、『社会資源マップ』を社会資源の理解ということに留めず、社会資源の活用や開発にも生かすことができると考える。「社会資源の理解・活用・開発」に関する能力は、保健師にとって重要な専門能力の1つである。佐伯・和泉・宇座・高崎（2003）は、保健師の専門職務遂行能力の構造を2区分し、「地域支援および管理能力」を挙げており、まさにその能力に「社会資源の理解・活用・開発」に関する能力が位置付けられる。また、岡本他（2007）は、今、特に強化が必要な保健師の専門能力5つのうちの1つとして、政策や社会資源を創出する能力を示している。そして、厚生労働省（2013）より示されている「地域における保健師の活動に関する指針」においても、社会資源の創出に関することが述べられている。加えて、2022年度の保健師助産師看護師養成所指定規則での第5次カリキュラム改正では、保健師教育が28単位から31単位に充実し、社会や組織の変革を促進するためには、集団を組織化し、社会資源を開発する実践能力が重要であることから、到達度の示し方を修正するなどし、社会資源を活用できる能力や施策化する能力を強化することとしている（厚生労働省, 2019）。これらのことから、「社会資源の理解・活用・開発」は保健師基礎教育において、より強化していく内容の1つであると考えられる。

中島・市原・永井・平塚・照沼（2018）は、保健師学生の家庭訪問における社会資源の活用に関して、訪問前は表面上の捉え方に留まって



いたが、訪問時には地域のエンパワーメントや開発の視点を、訪問後には対象者や家族にとっての活用の意味を考えるなど視野の拡がりがあったことを報告している。このことから、訪問をするなど、一技術の経験そのものの学びだけでなく、その後続く保健師活動に展開していく意味づけの必要性がわかる。よって、実習記録の『社会資源マップ』を単なる実習記録の1つとして捉え、既存の社会資源の理解だけに留めず、社会資源の活用や開発の視点まで拡げ、実習後の事例検討などの演習にも活用できると考えられる。そのため、教員は地域診断に関わる講義や演習の中で、『社会資源マップ』の目的や実習中の活用の仕方などを学生に丁寧に伝えていくと共に、学生が実習の中で、【事前に書いた社会資源マップを基に地域に身を置き、特徴を掴むようにした】り、【住民から得た情報を加筆して整理した】際には、教員の発問等において、それまで情報収集した量的データと質的データの分析結果を総合的にアセスメントする地域診断を進めていく一助として活用することを繰り返し確認することが望まれる。そして、実習後に行う講義や演習においては、学生が実習で取り組んだ地域診断で明らかとなった健康課題に関連する情報から、総合的にアセスメントして、既存の社会資源を活用したり、必要に応じて新たな社会資源の開発をすること、また、地域に必要なケアシステムを構築したり、施策化することの理解を深める内容を盛り込むなどし、社会資源の理解に留まらず、社会資源の活用や開発まで活用させ得るよう、意味づけをしながら理解を深め、技術を強化していくことが必要だと考えられる。

保健師は、地域のアセスメントにより、地域住民にとって必要なサービスや社会資源が不足していると判断された場合は、それをつくり出す活動を行う（荒賀・後閑・鳩野・神庭、2020）。また、荒賀他（2020）は、社会資源を「開発した後は、行政や地域のなかでその社会資源が認知されるよう働きかけるとともに、地域のニーズとの合致状況やその効果について継続的にみていく必要がある」としている。保健師は、地域診断により課題を抽出し、その課題に応じた施策を探りながら、必要性の根拠を示し、地域に合った方法で展開していくという特性があり、研究的な視点も必要不可欠である。井伊他（2022）は、「保健師は研究力を要する仕事であ

り、「仕事の評価」をする手法として「分析と統合」を行い、分析に基づいて考えながら活動することで保健師活動の効果を実感すると共に、活動の面白さが分かる」と述べている。また、看護職の倫理綱領の一項目に「看護職は、研究や実践を通して、専門的知識・技術の創造と開発に努め、看護学の発展に寄与する」（公益社団法人日本看護協会、2021）と明記されており、研究は看護専門職として自己成長を図る上で不可欠なものと言える。そして、高橋他（2018）は、「保健師は常に社会情勢を踏まえて的確に健康問題を捉え、保健医療福祉分野の研究成果を活用しながら専門家として問題を解決・改善していく。研究に関する能力は保健師となっても重要な能力であり、保健師学生のうちに身につけておく必要がある能力である」としている。研究的な視点をもつことで明確な根拠の基に地域の課題に応じた活動ができると考えられるため、今後の保健師教育においては、研究が専門職業人としての責務であることや、保健師活動を展開する上での研究的視点の必要性についても触れ、学生が『到達度』のひとつひとつの技術項目についての的確に解釈し、到達目標に到達できるようにしていくことが必要だと考える。地域の課題に応じた活動をしていくことは、『到達度』の技術項目の理解にもつながり、それが「社会資源の理解・活用・開発」に関する能力を高めることにもつながると考える。

## VII. 本研究の限界と今後の課題

本研究は一看護系大学の保健学科目選択者を対象としたもので研究協力者が少数で限定的であることから、一般化には限界がある。今後は、本研究で明らかとなった課題を反映させ、新たな内容で講義・実習を行い、『到達度』の活用状況や到達度に到達するための行動の変化などについて研究を行い、保健学科目選択学生の「社会資源の理解・活用・開発」ができる教育内容を検討する必要がある。

## VIII. 結論

A看護系大学の保健学科目選択学生の『到達度』の活用状況、『到達度』における5つの技術項目の到達度に到達するための行動、「社会資源マップ」に取り組む目的の解釈及び実習中と実習後での活用状況を明らかにし、保健学科目選択学生が「社会資源の理解・活用・開



発」ができるように保健学科目の教育内容を検討することを目的に行った。研究協力者は、A看護系大学で2022年度に保健学科目を選択した4年次の学生で、本研究への参加について同意が得られた5名であった。『到達度』の活用は、実習後の講義や演習の場面への拡がりが見られず、5つの技術項目の解釈は、その技術項目が何を表しているかを十分に解釈できていない項目のほか、狭義の解釈に留まっている項目もみられた。『社会資源マップ』は、量的データと質的データの分析結果を総合的にアセスメントする地域診断の一環であるという目的は理解できていた。

このため、保健師教育に関わる講義や演習で、『到達度』を活用することの意義や効果を繰り返し説明し、学生に意識づける必要がある。また、『到達度』を提示する際、各技術項目が何を表しているのか、どのように取り組むことで到達できるかを伝え、機会を捉え、学生の解釈を確認する必要がある。そして、『社会資源マップ』は、社会資源の活用や開発の視点まで拡げ、実習後の事例検討などの演習にも活用していく必要性が示唆された。

## 謝辞

本研究に御協力いただいた学生の皆様に深く感謝申し上げます。

## 文献

- 荒賀直子, 後閑容子, 鳩野洋子, 他 (2020): 公衆衛生看護学. jp 第5版, インターメディカル, 東京, 512.
- 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会: 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告 (2011). [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/\\_\\_icsFiles/afldfile/2011/03/11/1302921\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/__icsFiles/afldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf) [検索日: 2022年3月27日]
- 波田弥生, 山下正, 藤本優子, 他 (2016): 「保健師教育の技術項目と卒業時の到達度」の学生自己評価による保健師教育の評価 - 新旧カリキュラムにおける到達度の比較 -, 神戸市看護大学紀要, 21, 37-47.
- 萩原智代, 南部泰士 (2019): A 看護大学公衆衛生看護学実習における実習前後の調査からみた教育効果の検討 - 「保健師教育に求めら

れる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」を用いた学生の自己評価からの考察 -, 日本農村医学会誌, 68 (1), 31-44.

- 井伊久美子, 勝又浜子, 森永裕美子, 他 (2022): 新版保健師業務要覧第4版2022年版, 日本看護協会出版会, 東京, 246-251.
- 公益社団法人日本看護協会 (2021): 看護職の倫理綱領, [https://www.nurse.or.jp/assets/pdf/nursing/code\\_of\\_ethics.pdf](https://www.nurse.or.jp/assets/pdf/nursing/code_of_ethics.pdf) [検索日: 2023年2月2日]
- 厚生労働省 (2010): 看護教育の内容と方法に関する検討会 第一次報告, <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001316yatt/2r985200000131al.pdf> [検索日: 2022年3月27日]
- 厚生労働省 (2013): 地域における保健師の保健活動に関する指針, [https://www.mhlw.go.jp/web/t\\_doc?dataId=00tb9310&dataType=1&pageNo=1](https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00tb9310&dataType=1&pageNo=1) [検索日: 2023年3月27日]
- 厚生労働省 (2019): 看護基礎教育検討会 報告書, <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> [検索日: 2023年2月7日]
- 文部科学省 (2021): 保健師教育にかかる実態調査令和元年度版. [https://www.mext.go.jp/content/20210302-mxt\\_igaku-1367161\\_8.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210302-mxt_igaku-1367161_8.pdf) [検索日: 2022年3月27日]
- 永井良三・田村やよひ監修 (2013): 看護学大辞典第6版, メジカルフレンド社, 東京, 972.
- 中島富志子, 市原千里, 永井健太, 他 (2018): 保健師学生の家庭訪問体験における対象理解に関する研究〜社会資源の活用に関わる分析〜, 東都医療大学紀要, 8 (1), 31-39.
- 仲下祐美子 (2018): 看護系大学生の「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達度」の自己評価に関する文献レビュー, 大阪医科大学看護研究雑誌, 8, 73-83.
- 岡本玲子, 塩見美抄, 鳩野洋子, 他 (2007): 今特に強化が必要な保健師の専門能力, 日本地域看護学会誌, 9 (2), 60-67.
- 佐伯和子, 和泉比佐子, 宇座美代子, 他 (2003): 行政機関に働く保健師の専門職務遂行能力の測定用具の開発, 日本地域看護学会誌, 6 (1), 32-39.
- 鈴木良美・斉藤恵美子・澤井美奈子, 他 (2016): 保健師選択制導入前後における学生の技術到

達度と実習体験に関する評価, 日本公衆衛生雑誌, 63 (7), 355-366.

高橋秀治, 松本憲子, 中村千穂子, 他 (2018): 公衆衛生看護学実習の到達度を高める教育方法に関する研究－実習前後の学生の「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」自己評価の変化から－, 保健師教育, 2 (1), 66-77.

富田早苗, 西田洋子, 石井陽子, 他 (2020): A 大学公衆衛生看護学実習 3 年間における学習到達度－全国調査の比較－, 川崎医療福祉学会誌, 30 (1), 377-384.

### Abstract

The purpose of this study is to clarify the utilization status of “Practical Competency and Performance Goals for Public Health Nurses, and Achievement Level Required at Graduation” (hereafter referred to as achievement level) of students who have selected health sciences courses at A Nursing University and to consider the educational content of public health subjects so that they can perform the “understanding, utilization, and development of social resources.” The research method used was focus group interviews. The study results indicated that there was no significant expansion of the utilization of “achievement levels” before and after practical training and that some technical items had interpretation insufficiencies or remained narrowly interpreted. The “social resource map” was understood to be part of a comprehensive assessment of community diagnosis. Therefore, it is necessary to repeatedly explain the significance and effects of utilizing the “achievement level” to students. When presenting the “achievement level”, it is necessary to convey what each technical item represents and how to achieve it and confirm the students’ interpretation. Additionally, the study suggested the need to expand the positioning of the “social resource map” to the perspective of utilizing and developing social resources and utilize it in exercises such as case studies after practical training.

**Key Words :** health nurse education, practical ability, understanding, utilization, and development of social resources, professional ability